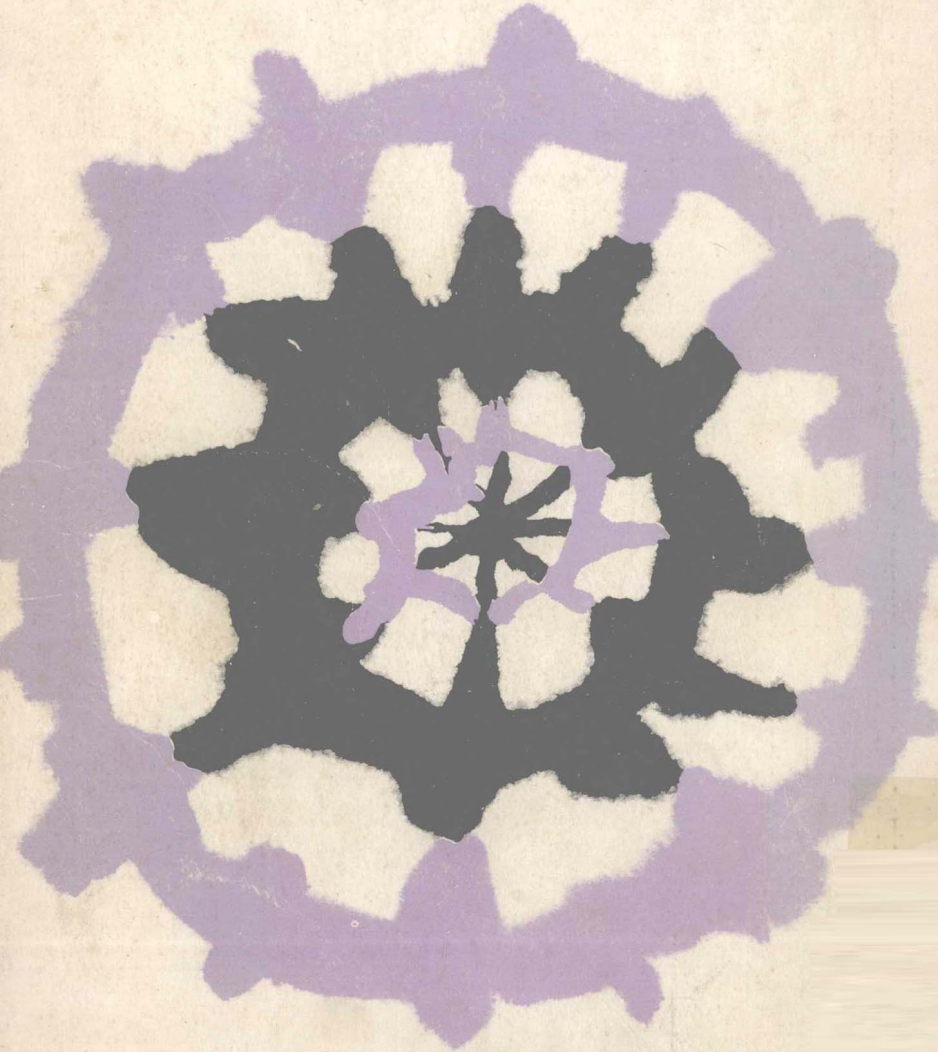
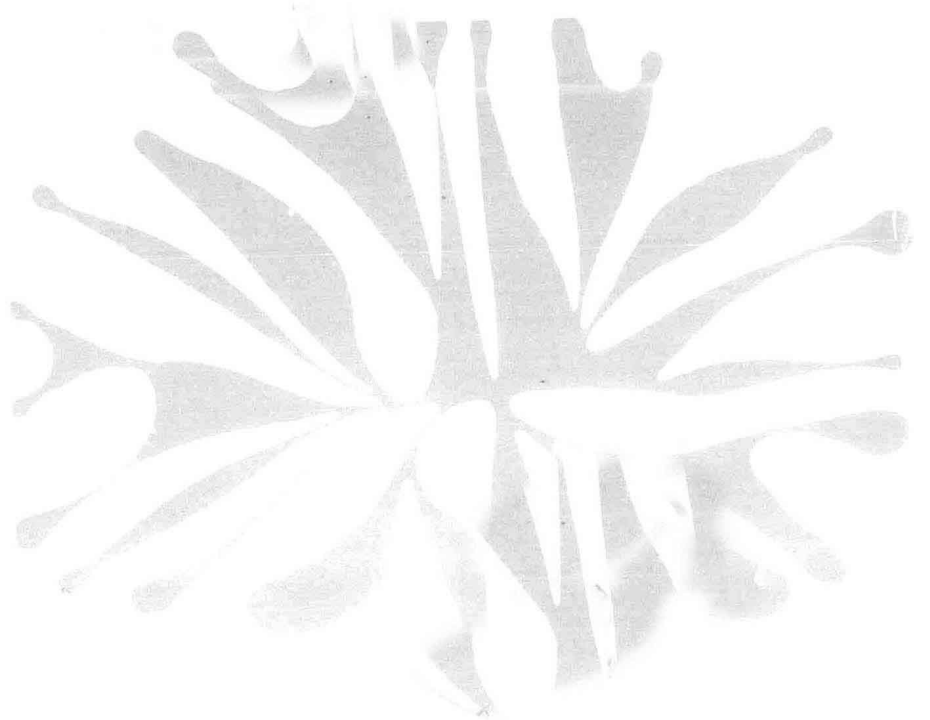
結城昌治推理シリーズ

ある恋の形見





結城昌治推理シリーズ

ある恋の形見

講談社版

結城昌治推理シリーズ 5
ある恋の形見

昭和四二年一月一五日　第一刷発行
著　者　結城昌治
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　東京（942）一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　共同製本株式会社
定　価　三二〇円
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。
© 結城昌治　昭和四二年

Printed in Japan

目次

蝮の家……五
犯行以後……二四
ある恋の形見……四三
坊主頭……六〇
温情判事……七三
とらわれた女……八九

不倫……一〇六
もつれ……一二四
行方不明……一四二
最後の分別……一六〇
Q興信所調査ファイル……一七八
親のかたき……二一七
完全犯罪……二二一
あとがき……二二五

装幀　村上　豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

結城昌治推理シリーズ　5

ある恋の形見

蝮の家

夫

勝気な妻である。土佐犬のように勝気な妻だ。

私が離婚を考え始めたのは最近のことではない。おそらく、彼女の父が死んだとき以来、そのことを考えつづけている。

都心に大きな付属病院をもつK医科大学の教授として、妻の父はかなり著名な学者であった。妻はその一人娘として、わがままいっぱいに育てられたようである。母親は彼女の幼い頃に亡くなっていた。

私はといえば、地方病院の貧しいレントゲン技師の四男に生まれ、奨学資金の扶けをかりなければ、大学を出ることもできなかったろう。そのような私にとって、唯一の幸運は妻の父である教授の知遇をえたことであった。多くの同僚がアルバイトに追われている時間に、私は教授の私的な助手として、やがては自分の仕事ともなる研究に没頭することができた。

インターンを修了すると、私は教授の推輓を得て大学に残された。今度は正規の医学部職員としての助手である。私にかけられた教授の期待を知って、発奮せずにはいられなかった。薬品の匂いに埋もれたような毎日の中で、背後を流れていく青春を惜しいとも思わなかった。当時の私にとって、青春とは仕事そのものであったと言えよう。

教授から、その一人娘との結婚を望まれたとき、私は驚愕した。かりそめに考えぬことではなかったが、実現可能なものと考える自惚れは持てなかったからである。

「娘も君との結婚を望んでいる」

教授はそう付け加えた。断わる理由はなかった。

彼女は美しかった。ショウ・ウィンドウの中にあって手の届かない宝石のように、私には得難いものと思われていた。それは貧しい者の眼が囚われる錯覚だったかもしれない。不遜な身ぶり一つにも、私は高慢な心を見ずに気品の高さを見て頭を垂れていた。議論をすれば、むきになってかかってくる気の強さを、愛らしい魅力の一つにさえ数えていたのだった。

突然の幸福は人間を単純にしてしまう。眩しいひかりの中にいる思いで、私は影の部分を見ることができなかった。

女子医大を出た彼女のインターン修了を待って、私たちは結婚式を挙げた。

幸福とは、誰の場合にも幻影にすぎないのだろうか。私の場合、この幻影が消え去るまでに、たいした時間はかからなかった。

「下品だわ」

これは彼女が私を侮辱するときの慣用句である。箸の上げ下ろし一つにも、私の育った貧しい世界を思い出させようとした。そして、屈辱に耐える私を愉しむかのように、かすかに薄い唇を歪めて笑った。この屈辱に耐えたのは、養子の悲哀などというマゾヒズムがあったからではない。教授の恩義のため以外のどのような理由もなかった。

私に対する彼女の反感が、医学徒としての劣等感に基因していることを指摘するのは易しい。

私たちが結婚して五年目の秋、教授は脳内出血のために自宅で急逝した。

臨終に際して、絶え絶えに消えてゆく教授の脈搏を、私は右手、彼女が左手をはかった。私は泣かなかったし、彼女も涙を見せなかった。おそらく、互いに相手を意識することさえなかったなら、声をあげて泣いたであろう。

教授の死を境に、私たち夫婦のこころは、もはや結び合おうとする努力を完全に投げ棄ててしまった。温厚篤実なばかりで、一片の政治性をも持ち合わせなかった教授は、医師としても学者としても、不遇な生涯であった。僅かな退職金と弔慰金とを除けば、遺産は皆無というに近かった。

現在、妻は女子医大付属の癌研究室へ隔日勤務、私はK医大講師として、制ガン剤の臨床実験をつづける傍ら、自宅にも研究室を設けて、助手一名とともに制ガン性抗生物質V・S・Oの研究に専念している。

そして、日曜日昼食後のたった今、眼前の事実についていえば、妻はテレビを眺めながら、三十分もかけて切りそろえた爪にヤスリをかけている。そして私は、最近ふとりかけてきた妻の腰まわりに眼をやりながら、いかにして離婚すべきかを考えている。

妻は蝮のように陰険である。わがままで狡猾で嘘つきだ。女の虚栄心のありったけと、男にも稀なほどの名誉心を抱いている。

妻は決して離婚に同意しないだろう。V・S・Oの研究がほとんど完成に近いことを知っているからだ。この秋の学会に、私はV・S・Oの臨床効果を発表する予定である。病理学的にも非難の余地はない筈だし、学会で認められることはほぼ確実といっていい。厚生省の認可を待ちきれずに、気の早い製薬会社は量産の準備をすすめてくるだろう。日ならずして、私は助教授に昇格し、各大学からも講師としてひっぱりだこになることが予想される。そして製薬会社からは、立派な研究室と重役の椅子とを与えられるだろう。

その輝かしい日がやってくるまでは、妻は決して離婚を承知しない。今の私は僅かな研究費にも不自由している。

慰藉料をふっかけたところで、支払能力のないことは明らかなのだ。
しかしV・S・Oの研究が成功すれば、彼女の要求しうる慰藉料は少なからぬものになる筈である。あるいは私以上の期待をもって、彼女は秋の学会を待っているにちがいないのだ。
私はできるだけ早く離婚しなければならない。

妻

妻とは名ばかりの生活が、もう半年以上もつづいている。
結婚は失敗だった。でも、今のわたくしは失敗をくやんではいない。嘆いたり悲しんだりするほど、夫を愛した記憶もなかった。
夫の不貞に気がついたのは、父が脳内出血でたおれた晩だった。
その夜、病院の宿直と称して家をあけていた夫の姿は、病院にも大学にも見あたらなかった。心あたりの知友人をたずねたけれど、電話機に返ってくる応えは、わたくしを恥じいらせるばかりだった。翌る日の午後になって、夫は大学の自動車でかけつけた。前夜来昏睡をつづけた父が息をひきとったのは、その夜更けだった。
宿直をいつわったことについて、夫はついにひとことの弁解もしなかったし、わたくしもたずねはしなかった。そのかわり、新聞広告でみた私立探偵社をたずねて、夫の素行調査を依頼した。
探偵社の調査は、一週間後に報告された。
——夫の愛人の名は三谷千鶴子、元K医大付属病院看護婦、二十二歳、すでに半年ほど前から、中野にアパートを借りて住まわせていたという。そのほか、きれいにタイプされた報告書は、三谷千鶴子の容貌、生活状態、近隣の風評、夫の来訪頻度、探偵の尾行経過などを記して、上質の白紙四枚を埋めていた。
わたくしは嫉妬を感じなかった。三面鏡に向かって、こみあげてくる笑いをこらえただけだった。
その日、わたくしは探偵社の報告書を夫の寝室の床の間に投げだしておいた。翌る日、夫が出勤したあとの寝室を見ると報告書は消えていた。このことについて、夫はやはり何もたずねなかったし、わたくしもかたくロをつぐんでいた。
わたくしは夫と別れたい。
夫の爪はいつもまっくろに汚れている。何日も風呂に入ろうとしないし、下着を一と月以上替えなくても平気でいる。歯をみがいたことはない。馬のように大食いで、口をあけたまま犬のようにクチャクチャと音をたてて食べる。そして食べながら貧乏ゆすりをする。ご飯に味噌汁をかけるのが好きで、お新香のほかはおかずをいらないという。

わたくしはそのような夫を我慢できない。

夫の長所として、その勤勉さを挙げる人がいる。しかし、仕事以外になにもすることのない人間だとしたら、なぜそれが長所だろうか。夫はロバのように愚鈍で退屈な男——音楽も芝居も、映画も小説も、テレビでさえ夫の関心をひくことはできない。そのくせ、十いくつも年下の小娘を、薄汚いアパートに囲っている。おそらく、病院では夫の下ではたらいていた女だろう。下品、不潔、卑劣な男。

わたくしはそのような夫をゆるす気にならない。

夫みたいに貪欲なエゴイストがいるかしらと呆れてしまうことがある。大学病院の研究室や薬局から、個人的な研究用に薬をぬすんでくるくらいのことは珍しくない。そして、大学からサラリーをもらっていながら、その大部分の時間を大学には内緒の仕事に費している。V・S・Oの研究、それを先輩や同僚に盗まれることを恐れて、アルバイトのインターンまで助手に雇って自宅に通わせているが、研究材料はみんな大学から持出したものだ。これらのことは助手の渡辺がよく知っている。もちろん実験対象の患者も、在宅患者の中から夫個人としてつかんでいるらしい。

わたくしはどうしても夫と別れたい。

でも、今別れたのでは損をしてしまう。せっかく私立探偵をつかってまで、夫に隠し女のいることをつきとめたのだから、とれるだけの慰藉料をとってやらねば損だ。渡辺の話によると、制ガン性抗生物質V・S・Oはほとんど七十パーセント近い臨床効果を得て、いまは病理学的うらづけをまとめている段階だという。もしそれが事実であり、今秋の学会で認められたとしたら、夫には莫大な金が入ってくるはずだ。離婚はそれからでも遅くはないし、それからでなければ、洋服一着分ほどの慰藉料もとれないにきまっている。妻の座を恥ずかしめられた代償として、わたくしはいくらくらい請求できるだろうか。

「百万円がいいところかな」

昨夜、渡辺はわたくしの胸の中でそう言った。

「だめよ、それっぽっち。最低一千万円。それ以下だったら別れてやらないわ」

わたくしは本気で考えている額を言った。そして、多少なりとも明確な効果の認められる制ガン薬を発見したとしたら、それがいかに発見者の地位をたかめ、製薬会社とともに得る利益がどんなに大きなものかを説明してやった。

渡辺は可愛い男、インターンの習修中で、まだ学生気のぬけない青年だけど、浅黒くひきしまった肌はなめらかで艶がある。わたくしを知るまで、女に触れたことがないというのは本当のようだった。夫の助手にはもったいないくらい優秀な青年らしいが、わたくしの前では甘えんぼうの奴隷にすぎない。最初は、夫に捨てられた自分に残っている魅力をたしかめたいという思いだけから、渡辺を誘ったにすぎなかった。今は、彼の若々しい肌と、わたくしを抱きしめる強い力とを愛している。でも、夫と別れたからと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

いって、渡辺と結婚する気にはならない。
おそい昼食をすませた夫は、今、わたくしのうしろでタバコをのんでいる。テレビは化粧品のコマーシャルをながながとつづけている。夫はそんなテレビでも見ているのだろうか。ほかに見るものはないはずだから……。
夫はわたくしと渡辺との関係に気づいていない。
テレビを見ている夫は退屈しているだけだろう。草を食べすぎた牛のように。

夫

「妻をどう思うかね」
私は回転椅子を廻して、顕微鏡を覗いている渡辺を見た。
「――？」
振返った渡辺は、問われた意味がわからぬという表情をした。しかし、それは本当だろうか。渡辺の頬はかすかに紅潮した。私は質問を重ねた。
「好きかね、嫌いかね」
渡辺はやはり答えられなかった。狼狽している。質問が唐突すぎたのだ。しかし、狼狽した理由はそれだけではない。意中を見透かされたという思いが、彼の冷静さを乱したのだ。私は、彼が妻を見るときの熱っぽい眼差しを幾たびか心にとめた。妻はそんな渡辺の内面に気づいていないだろう。他人に対しては気位を保つことだけでいっぱいの女だ。
「答え難ければ答えなくていい」私はあらためて渡辺を対座させた。「実は頼みたいことがある。おかしな頼みかもしれないが、君のためにもなることだから是非ききいれて欲しい。妻を誘惑してもらいたいのだ。とうに気づいているだろうが、私たちの仲はうまくいっていない。私は別れようと思っている。しかし、妻は素直に離婚を承知するような女ではない。私を苦しめるためという理由だけでも、別れようとはしないだろう。抽象的な不和を申し立てたくらいでは、裁判所も離婚を認めてくれない。彼女と別れるには具体的な離婚原因が必要なのだ。たとえば、妻の不貞というようなことだ」
私はしばらく言葉を途切らせた。渡辺の様子を見るためだった。そして、彼にも考える時間を与えるためだった。
両手を膝の上に置いて、頭を垂れた渡辺の表情は読めなかった。
渡辺は忠実な青年である。私の意思に逆らうとは考えられない。だからこそ、私は彼を選んだのだ。いわゆるハンサムな奴で、幾分なりとも馬鹿にみえぬ男は稀である。渡辺はその稀な一人といっていいだろう。妻の最も好むタイプだ。私に忠実であって、なお妻を誘惑しうる者は、私の周囲に彼をおいていない。真面目そうな容貌とはうらはらに、彼が女色の才に長けていることは、看護婦たちの風評

を耳にしていた。結果として、妻と渡辺との仲が予期以上に親密となり、二人が結婚を望むようになったとしても、私の目算ははずれたことにならない。私には妻の不貞が必要なだけだ。渡辺のような人物を身近に選び得たことは、すでに私の勝利を告げている。彼が妻に手を出さないでいるのは、妻が隙をみせぬことも一因であろうが、私の信頼を裏切ることができぬためなのだ。

「もちろん——」私はつづけた。「決してきみに迷惑はかけない。きみはただ妻と遊んでくれればいい。もし彼女を自由にできるなら、どのように自由にしても差支えない。私は妻を愛していないのだ。妻はきみのような青年が好きだ。彼女の自尊心に気を配って近づけば、おそらく喜んで迎えるだろう。彼女は一見冷たい女に見える。気位が高いためだ。しかし、冷たく見える女ほど多情なものだということを、かならず彼女から教わるにちがいない。勇気を持ちたまえ。きみに必要なのは僅かな勇気だけだ。不貞の事実を指摘することさえできれば、虚栄心の強い彼女はかならず離婚に同意する。それでも彼女が裁判所で争うとは考えられない。他人にスキャンダルを知られるくらいなら、どんな屈辱にも耐える女だ。妻の情人として、きみの名が世間に洩れることはない。きみに迷惑はかからないのだ。幸いに、V・S・Oは秋の学会に報告できる見込みがついた。私は当然忙しくなるだろう。そのとき、私に与えられるポストの幾つかは、きみに廻すつもりだ。少なくとも、君を講師として迎える大学は二、三にとどまらないだろう。もし、学会前に離婚できたら、これもきみのお陰だから、研究発表の際は共同研究者として君の名を加えたいとも考えている」

私はここでもう一度言葉を切ると、映画のチケットを渡辺の前に置いた。昨日、厚生省へ行った帰りに銀座へ出て買ったものである。つづき番号の指定席二枚。映画の内容は知らないが、大きなネオン入りの看板にフランク・シナトラという俳優の写真がかかっていた。この俳優のことは、妻の化粧箱に入っていたブロマイドで知ったのが初めだが、彼女はこの俳優の歌を聞いたあとで異常な興奮を見せたことがあった。あんな俳優のどこがいいのか分らないが、七十ミリのスクリーンでシナトラの歌を聞いたら、逆上して鼻血を出すかもしれない。そのような精神状態は、渡辺の誘惑を円滑に導くだろう。

「切符の日付は明後日、最終回の七時五十分からとなっている。かなり評判のいい映画らしいから、妻もよろこぶだろう。私はこれから大学へ用事がある。私がでかけた後で、この切符を利用したまえ。明後日は映画をみるだけにしておいた方がいいだろう。急ぐことはない。しかし希望としては、一か月くらいの間に、二人がホテルへ入る姿を見せてもらいたい。経過報告を愉しみにしている」

「しかし——」

渡辺は初めて顔を上げた。さすがにためらう様子であっ

た。
「迷ってはいけない」私は渡辺をさえぎった。「私の頼んだことは理不尽なことかもしれぬ。そして、きみの行なうことは不道徳とも言えよう。しかし、きみはこれから行なうことを青春の特権だと思いたまえ。夫の私が許しているのだ。私に遠慮は要らないし、あるいは妻を喜ばすことにもなる。失敗すれば失敗したで構わん。妻を恐れることも無用だ。きみの将来は私が責任をもって預っている。冒険を愉しむくらいの気持でかかればいいだろう」
数日前の日曜の午後、テレビの前で爪ヤスリをかけている妻の後姿をみながら考えた計画を、私はようやく渡辺に話し終った。自分でさえ非常識な話とは思う。しかし、これ以外に方法がないとしたら、どうしても渡辺を説得しなければならなかった。
渡辺は承知したようである。口には出さなかったが、はっきり頷いてチケットを受け取った。
外出の支度をして玄関へ出ると、たまたま勤めから帰ったらしい妻に出会った。
妻は習慣的に視線を避けた。無視することが、最大の侮辱の方法だということを知っているのだ。
「今夜は帰らぬかもしれない」
私は靴ベラを女中に返しながら、妻にも聞こえるように言った。
妻は無言で奥へ消えた。
妻の足は大きい。下腿部は細いが、十文七分の足袋をはく。
妻の帰宅はいつもより早かった。あるいは早退して、最近友人が開業したという耳鼻科専門の医院へ行ってきたのかもしれぬ。蓄膿症なのだ。三回手術をしたが三回とも失敗した。それで、口をあけたままでなければ眠れない。ムジナのような鼾をかく。
妻の鼻は大きい。本人は気に入っているらしいが、小作りな顔の中で鼻だけが目立つ。やはり大きいのだ。笑うと、鼻の両脇にある小皺がよる。だからあまり笑わない。

妻

——今夜は帰らぬかもしれない。
妻のわたくしを面前にしながら、夫は女中にだけそう告げて外出した。
子供っぽい意地の悪さがおかしくてたまらない。鈍感な夫は、自分の演じているこっけいさに気がつかないのだ。
夫は外出先を言わなかった。酒をのめぬ夫が夕方から出かけるところといえば、三谷千鶴子という女のいる中野のうすぎたないアパートにきまっている。わたくしも行先をたずねたりはしなかった。
夫は小肥りで背が低い。それなのに、帽子をかぶりステッキを持ちたがる。老人のように背中をまるめて、アメ

リカ帰りの友だちからもらったという籐のステッキをひきずるように腕にかけてあるく。
夫の手は大きい。グローブのように大きな手、赤茶けて皺だらけで、いつもかさかさに乾いている。わたくしはその大きな手で殴られたことを忘れない。二年以上も前のことだけど、そのときの痛みを忘れることはできない。それまで、わたくしは両親にさえ打たれたことはなかった。
「渡辺はいるの？」
わたくしは女中にたずねた。
「はい、研究室の方にいらっしゃると思います」
雇ったばかりの女中は、もう六十ちかいお婆さんだけど、言葉づかいがていねいで気持がいい。
わたくしは勝手口から下駄をつっかけて、庭の隅の研究室をのぞいた。
渡辺は椅子によりかかって、ぼんやりタバコをふかしていた。
「仕事は終ったの？」
わたくしは渡辺のうしろにまわって、首すじにベーゼをした。
「うん」
渡辺はうなずいてから、わたくしを振りかえって意味のありそうな笑いかたをした。
わたくしは渡辺の手をとって立ちあがらせた。そして、彼のひろい胸の中へ体をくずしていった。渡辺は大胆にわたくしを抱きとめた。ワンピースの背中のファスナーをはずして、両肩をあらわにさせた。
研究室内で、彼のこのような大胆さは、わたくしをおどろかせた。夫が忘れ物をとりに戻ることもありうるし、女中が覗き見しないとも限らない。昨日までの渡辺は、そのようなことを臆病すぎるくらい警戒していた。それなのに、今はわたくしの方が不安になるほどだった。
「明後日、映画を見にいきませんか。シナトラが出ています」
男の大胆さは好ましいけれど、厚かましさにはついていけない。執拗な愛撫をのがれたわたくしに、彼は二枚のチケットを指先にひらひらさせた。
「あら？」
わたくしはすぐに機嫌をなおしてチケットを受けとった。見たいと思っていた映画だった。それに、映画をおごるのはいつもわたくしの役目で、彼におごられるなんて、想像もしないことだったから。
「先生にいただいたんですよ。おくさんをお誘いしろといってね……」
渡辺はおどろいているわたくしを愉しそうに見まもって、つい先ほど、夫との間にかわされたという話をつたえた。
《わたくしを渡辺に誘惑させ、そのことをタネに離婚をせまる——》

ケチで小心で狡猾で、蝮のように陰険な夫の考えそうなことだった。わたくしと渡辺との仲を知らずにいるところが、いっそ愛嬌があるといってやらなければ可哀想なくらい。

めかけ女を発見された不利な立場を、わたくしの不貞によって帳消しにして、慰藉料も出さずに協議離婚にもっていこうという計略にきまっている。

わたくしは笑ってしまった。夫の愚かさがおかしくてたまらなかった。

渡辺は熱っぽい抱擁をくりかえして、自分のアパートに誘おうとしたが、わたくしは明後日の映画見物を約束しただけで彼を帰らせた。ひとりきりになって考えたいことが、たくさんあったからだ。

居間に戻ってひとりきりになると、わたくしはもう笑わなかった。落ちつこうとしても、体はマラリア患者のようにふるえた。憎悪のためだった。ふるえを止めることはできなかった。かつて、わたくしは人を憎んだ記憶がない。夫にたいする軽蔑にも、憎悪はふくまれていなかった。今までのわたくしは、夫の醜さを憐んでいたにすぎない。憎悪——わたくしは初めて、この感情の烈しさを知った。夫の卑劣さを、ゆるすことはできないと思った。

——夫を殺すことができたら……。

いつの間にか、わたくしは恐ろしい結論にみちびかれようとしていた。夫を殺すことができたら……、それはなんと素晴らしいことだろう。

あんな男、死んでしまえばいいのに——、わたくしは幾たびそう願ったことか。でも、夫を殺すという考えだけは、盲点のように、今まで脳裏に浮かばなかった。

わたくしはそっと眼をとじた。そのとじた瞼のおくで、わたくしは夫の死体を見下ろしていた。そのような場面の想像は、これが初めてではないような気持がした。無意識の中で、殺意は隠し子のように成長していたのだろうか。わたくしは快感につらぬかれた。——ぞっとするほど厭らしく分厚い唇、夜の間に生えかかったわいせつなひげ、ぶよぶよと蛙のようにふくらんだ白い腹部、そして蛇のように執拗な腫んだ脚、これが夫の死体、グロテスクな軟体動物の屍。

わたくしは自分の考えに夢中になっていった。

もし夫を殺すことに成功したら、V・S・Oの研究はわたくしの仕事として発表できないだろうか。渡辺はアルバイトの助手にすぎない。V・S・Oはあくまでも夫のものだ。夫の遺産は当然妻のものになる。V・S・Oのことは大学にも内緒の仕事だから、渡辺以外に知る者はいない。わたくしは医師で、制ガン性抗生物質の研究もしている。わたくしがV・S・Oを発見し、ひそかに研究をなしとげたとしても怪しまれる理由はない。世間知らずの渡辺には、いくらかの金をつかませてやればいい。わたくしは一躍有名になる。新聞にも写真入りの記事がでるにちがいな

い。いくつもの大学から講師として招聘される。製薬会社は重役の椅子に札束をつんでくる。

そうだ。夫を殺すことは素晴らしいことなのだ。夫には殺されていい理由がある。わたくしはどうしても殺さなければいけない。その結果として得られるものは、当然の報酬と考えることにしよう。

わたくしは誰よりも幸福になりたい。夫のために失った青春を今こそ取戻さなければならない。

夫

昨夜は研究室で徹夜をしたので、起床したときは正午をすぎていた。

妻が食事の支度を整えた。

「婆さんはどうしたね」

私は女中の姿が見えないので尋ねた。

「ちょっと使いにやりました。間もなく戻ると思いますが……」

妻は素直に答えた。

私は驚嘆した。このように素直な妻は、むしろ無気味であった。食事の支度をしてくれただけでも意外だったのである。

私は妻のこころを計りかねたが、しかし、それは短い時間にすぎなかった。すぐに渡辺の報告を思い出すことができた。

妻は渡辺の誘いを退けなかった。渡辺の口ぶりから推すと、かなり積極的にデイトを承諾した模様である。筋書どおりに、渡辺は妻をシナトラの映画へ伴った。その日、妻はデコレーション・ケーキのように着飾って夕方から外出した。初恋に夢中な女学生のように浮き浮きした様子は、隠そうとしても隠しきれぬ喜びを現わしていた。私には行先を言わなかったが、女中には大森の伯母の家へ行くと言ったそうだ。彼女が家を出たあと、私は腹をかかえて笑った。妻の帰宅は十二時近かった。映画館を出たあと、コーヒーを飲んでから、銀座うらを新橋まで歩いて別れたというのが渡辺の報告であった。

——女房の手くらい握ったかね。

——はあ。おっしゃられたとおりにするつもりでしたが……。

——チャンスがなかったか。

——はあ。

問いつめられた渡辺は、子供っぽくはにかんでいた。初日だから已むを得まい。この調子でいけば、労することもないだろう。私は彼の肩を叩いて笑った。

第二の計画として、一両日中にボクシングへ誘わせることになっている。妻の好きなスポーツはボクシング、レスリング、そして相撲である。筋肉質の裸体がぶつかり合うスポーツが好きなのだ。とりわけ、ボクシングに示す熱意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c